

市九郎
もと淺草田原
町の旗本中川
三郎兵衛の家
僕であつた
が、事によつ
て主人を殺し
て逐電し、木

三 青の洞門

一

市九郎は、山野の分もなく、たゞひた走りに走つた。二十里に餘る

貧賤の島居
婦に上着して
強盜を働いて
ゐた。

道をたゞ一息に走つて、翌日の夕暮に、美濃國大垣在にたどり着いて居た。彼は、こゝへ来るまで、どこへ留まらうといふ當もなかつた。何人を頼らうといふ當もなかつた。たゞ、妄に逃げ走りたかつた。一途に今までの自分の生活から逃れたかつたのである。彼は、ふと大垣在の淨願寺と云ふ大寺の門前へ出た。殷々と鳴り響いてゐる暮六つの鐘を聞いた時に、彼の頼りない心は端なくもすがるべき最後のものを見付けたのである。淨願寺は、美濃一國眞言宗の總録であつた。市九郎は、現住明遍上人に、必死の教化を求めて、心からの懺悔をした。上人は、さすがに此の極重惡人をも捨てなかつた。市九郎が懺悔をした後に、有司の下へ自首しようといふのを止めて、
「重ね／＼惡業を積んだ汝ぢやから、有司の手によつて、身を梟木にかけられ、現世の報を自ら受くるのも罪亡しの一法ぢやが、それで

は未來永劫焦熱地獄の苦難は免れぬぞよ。それよりも佛道に歸依し衆生濟度のために身命を捨て、諸人を救ふのが肝心ぢや」と教化した。

市九郎は上人の言葉を聽いて、又更に懺悔の火に心を爛らせて、當座に出家の志を堅めた。彼は、上人の手に依つて得道して、了海と法名を呼ばれ、ひたすら佛道修業に肝膽を砕いた。道心勇猛の爲だらうか、僅か半年に足らぬ修業に、行業は氷霜よりも咬くなつた。朝は三密の要法をこらし、夕は祕密念佛の安座を離れず、智度の心早くも萌して、天晴の知識となり濟ました。彼は、自分の道心が定つてもう動かないのを自覺すると、師の坊の許しを得て、諸人救濟の大願を起し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

美濃の國を後にして、先づ京洛の地を志した。彼は、幾人もの人を殺しながら、たとひ佛門にはいつたとはいへ、自分が生きながらへ

て居る事を心苦しく思はずには居られなかつた。彼はさうした心持からも諸人のため身を粉々に碎いて自分の罪障の萬分の一をても償ひたいと思つて居た。殊に自分が木曾山中にあつて、行人をなやましたことを思ふと道中に廻り合ふ人々に對して償ひ切れぬ負擔を持つて居るやうに思はれた。

行住坐臥にも人の爲を思はぬことはなかつた。道路に難澁の人を見ると彼は手を引き腰を押してその道中を助けた。病に苦しむ老幼を貢うて數里に餘る道を遠しとしなかつたこともあつた。本街道を離れた村道の橋などがこはれて居る時は彼は自ら山に入つて樹を切り石を運んで修繕した。路の崩れたのを見れば土砂を運び來つて繕うた。畿内の國々から中國一帶の雲水の旅にひたすら善根を積むことに腐心した。が身に重なれる罪は山よりも高く積む善根は土堆よりも低きを思ふと彼は今更に半生の

悪業の深きを悲しんだ。自分の行つて居るやうな些細な善根によつて自分の極悪が償ひ切れぬ事を知つて彼は心を暗うした。旅路の宿の寢覺にはかゝる頼もしからぬ報償をしながらなほ生を貪つて居ることが甚だ腑甲斐ないやうにさへ思はれて自ら命を縮めたいと思つたことさへあつた。がその度毎に不退轉の勇を振ひ興し諸人救済の大業を爲すべき機縁のいたらんことを祈念した。

享保九年の秋であつた。彼は赤間が關から小倉に渡り、豊前の國宇佐八幡宮を拜した後、山國川を溯つて著聞屈山羅漢寺に詣てんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷にそうてたどつた。

筑紫の秋は驛路の宿り毎に更けて、雜木の林には楡赤く爛れ、野には稻黄色に實のり、農家の軒には此の邊の名物の柿が眞紅の珠を

著聞屈山

羅漢寺

豊前の國下毛郡、羅漢寺の南、中津を去る四里にあ

聯ねて居た。

それは、八月に入つて間のないある日であつた。彼は秋の朝の光に輝く山國の清冽な流を右に見ながら、三口から佛坂の山道を越えて、午近き頃樋田の驛に着いた。さびしい驛で晝食の齋に有り付いた後再び山國谿にそつて南を指した。樋田驛から出外れると、道は又山國川にそつて、火山岩の河岸を傳うて走つて居た。

歩み難い石高道を、市九郎は杖を頼りにたどつて居た時、ふと道の傍に此の邊の農夫であらう、四五の人々の罵り騒いで居るのを見た。市九郎が近づくと、その中の一人は、早くも彼の姿を見付けて、「御出家様、これはよい所へ來られた。非業の死を遂げた哀な亡者ぢや。通りかゝられた縁に、一遍の回向をして下され。」と頼んだ。非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた旅人の死體であるまいかと思つた市九郎は、自分の過去の惡業を想起して、刹那に

わく悔恨の心に、兩脚のすくむのを覺えた。が、それは水死した男の死體であつた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々皮肉の破れて居るのは、どうした仔細ぢや。」と市九郎は、恐るゝさいた。

「御出家は旅の人と見えて、御存じあるまいが、此の川を半町も上れば、鎖渡しといふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が悉く難儀する所ぢや。此の男は此の川上の柿坂郷に住んで居る馬子ぢやが、今朝鎖渡しの中途で、馬が狂うたため、五丈に近い所を眞逆様に落ちて、見られる通りの無殘な最期ぢや。」と、その中の一人がいつた。

「鎖渡しと申せば、かねぐ、難所とは聞いて居たが、かやうなあはれを見ることは、度々ござるかの。」と市九郎は、死體を見守りながら、うちしめつて聞いた。

「一年に三四人、多ければ十人も、思はぬ憂目を見ることがある。無雙の難所故に、風雨に棧が朽ちても、修繕も思ふに委せぬのぢや。」と答へながら、百姓達は死體の始末にかゝつてゐた。

市九郎は、此の不幸な遭難者に、一遍の經を讀み終ると、足を早めてその鎖渡しへ急いだ。

そこまでは、もう一町と隔つて居なかつた。見ると、川の左に聳えて居る山が、山國川に臨む所で、十丈に近い絶壁に、斫り截たれて、そこに灰白色のぎざ／＼した、巖の多い肌を露出して居るのであつた。山國川の水は、其の絶壁に吸ひ寄せられたやうに、こゝへ慕ひ寄つて、その裾を洗ひながら、濃緑の色を湛へて、渦巻いて居るのであつた。

里人等が鎖渡しといつたのは、これだらうと、市九郎は思つた。その絶壁に絶たれてしまつて、その中腹を、松杉などの丸太を鎖で聯

ねた棧道が、危ふげに傳つて居る。かよわい婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戦くも理であつた。

市九郎は、岩壁にすがりながら、戦く足を踏みしめて、漸く渡り終つて、其の絶壁を振向いて見た。其の刹那であつた、彼の心に、咄嗟にある大誓願が、勃然として萌したのである。

積むべき贖罪の餘りに、小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業にあふことを祈つて居た。今、目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命が奪はれる難所を見た時、自分の身命を捨てて、此の難所を除かうと云ふ思付が、旺然として起つたのも、無理ではなかつた。二百餘間に餘る岩石を、剝貫いて道を通じようといふ不敵な誓願が、彼の心に浮んで來たのも、無理ではなかつた。

市九郎は、自分が求め歩いたものが、漸くこゝで見附かつたと思つ

た。一年に十人を救へば、十年には百人、百年千年と經つ内には、千萬の人の命を救ふことが出來ると思つたのである。

かう決心すると、彼は一途に實行に着手した。その日から、羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川にそうた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めたのである。が、何人も此の邊には馴染のない此の風來僧の言葉に耳を傾けなかつた。

「三町をも越える大磐石を、剝貫かうと云ふ、瘋狂人ぢや、は、は、は」と、笑ふものは、まだよい方であつた。

「大騙ぢや、針のみ、からのぞくやうな事を言ひ前にして、金を集めようと云ふ大騙ぢや」と、市九郎の勸説に、迫害を加へる者さへあつた。

市九郎は、一月にも近い間、勸進につとめたが、何人も耳を傾けぬのを知ると、奮然として、獨力この大業に當ることを決心した。彼は

カリカチユ
ア
漫遊。

石工の持つ槌と鑿とを手に入れると、自分たつた一人て此の大絶壁の一端に立つた。それは、一個のカリカチユアであつた。削落し易い火山岩であるとはいへ、川を壓して聳え立つ巖々たる大絶壁を、市九郎は、自分一人の力で剝貫かうとするのであつた。

「だうとう氣が狂つた」と、行人は市九郎の姿を指しながら笑つた。然し、市九郎は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して、觀世音菩薩に祈誓を籠めた後、渾身の力を籠めて、第一の槌を下したのである。が、それに應じて、二、三片の碎片が、飛散つたばかりであつた。再び力を籠めて第二の槌を下した。更に二、三片の小塊が、巨大な無限大の大塊から分離したばかりであつた。が、市九郎は少しも失望しなかつた。第三、第四、第五と、彼は懸命に槌を下した。空腹を感じれば、近郷を托鉢し、腹滿つれば、絶壁に向つて槌を下した。懈怠の心を生ずれば、眞言を唱へて、勇猛の心を振り起した。

一日、二日、三日、市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人はその傍を通る度に嘲笑の聲を送った。が市九郎の心は、そのためにしばらくも撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に槌を持つ手に力を籠めた。

やがて市九郎は、雨露を凌ぐ爲に、絶壁に近く木小屋を立てた。朝は、山國川の流が、星の光をうつす頃から起出で、夕は、瀬鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃までも、槌を振ふ手を止めなかつた。が行路の人々は、なほ嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたわけぢや」といつて、誰も市九郎の努力を眼中に置かなかつた。

が市九郎は、一心不亂に槌を振つた。槌を振つて居さへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨も、そこに無かつた。極樂に生れようと云ふ、欣求もなかつた。たゞそこに晴

晴した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、毎夜の寢覺に、身を苦しめた自分の惡業の記憶が、日に薄らいて行くのを感じた。彼はますます、勇猛の心を振ひ興して、一向惡念に槌を振つたのである。

新しい年が來た。春が來て、夏が來て、早くも一年が經つた。市九郎の努力は、空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれて居た。それはほんの小さい洞窟であつたが、市九郎の強い意志の、最初の爪痕を明かに示して居た。が、近郷の人々は、まだ市九郎をわらつた。

「あれ見られい。狂人坊主が、あれだけ掘りをつた。一年が間もがいて、たつたあれだけぢや……」と笑つた。が市九郎は自分の掘り穿つた穴を見ると、涙の出るほど嬉しかつた。それはどんなに淺くとも、自分が精進の力の如實に現はれて居るものに相違なかつ

た。又一年が経つた。市九郎は年を重ねて更に奮ひ立つた。夜は如法の闇に、晝なほ薄暗い洞窟の中に端坐して、たゞ右の腕のみを、狂氣の如くに振つて居た。市九郎に取つて、右の腕を振る事のみが、彼の宗教的生活の凡てになつてしまつた。

洞窟の外には、日が輝き、月が照り、雨が降り、嵐が荒んだ。が、洞窟の中には、間斷なき槌の音のみがあつた。

二年の終にも、里人はなほ嗤笑を止めなかつた。が、それはもう、聲にまでは出て來なかつた。たゞ市九郎の姿を見た後、顔を見合せて、互に笑ひ合ふだけであつた。が、更に一年経つた。市九郎の槌の音は、山國川の水聲と同じく、不斷に響いて居た。村の人達は、もう何とも云はなかつた。彼等が嗤笑の表情は、いつの間にか、驚異のそれに變つて居た。市九郎は、長い間、櫛らないために、頭髮はいつの間にか、のびて双肩に掩ひかゝり、浴せざれば、垢づきて、人間の

姿とも見えなかつた。彼は自分が掘穿つた洞窟の中に、獸の如くうごめきながら、狂氣の如くその槌を振ひつゞけて居たのである。里人の驚異は、いつの間にか同情に變り始めて居た。市九郎が暫しの暇を窺んで、托鉢の行脚に出かけようとすると、洞窟の口に思ひがけなく一椀の齋を見出すことが多くなつた。市九郎はその爲に、托鉢に費すべき時間を更に絶壁に向ふ事が出來た。

四年目の終が來た。市九郎の掘穿つた洞窟は、もはや五丈の深さに達して居た。が、その三町を超える絶壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものゝ、まだ、かくばかり見えすいた徒勞に合力する者は、一人もなかつた。市九郎は、たゞ獨りその努力をつゞけねばならなかつた。が、もう掘穿つ仕事に於て、三昧に入つて居た市九郎は、たゞ槌を振ふ外は何の存念もなかつた。もぐらのやうに、命のあるかぎり掘穿つて行く外

には何の他念もなかつた。彼は唯一人黙々として掘進んだ。洞窟の外には春が去つて秋が來て四年の風物が移り變つたが洞窟の中には不斷の槌の音のみが響いた。

「可哀さうな坊様ぢや。物に狂つたと見え、あの大盤石を穿つて行くわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを」と、行路の人々は、市九郎の空しい努力を悲しみ始めた。が一年経ち、二年経ち、丁度九年目の終に、市九郎の穿つた穴は、入口から奥まで、二十間を計るまでに掘進んで居た。

樋田郷の里人は、始めて市九郎の事業の可能であるのに氣が付いた。一人の瘠せはてた乞食僧が、九年の力で、これまで掘穿ち得るものならば、人を増し歳月を重ねたならば、此の大絶壁を穿ち貫く事も、必ずしも不思議でない、といふ考が里人等の胸の中に銘せられて來た。九年前市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川にそふ七

郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に付き始めた。數人の石工が、市九郎の事業を援ける爲に雇はれた。もう市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の槌の音は、勇ましく賑やかに、洞窟の中からもれ始めたのである。

が翌年になつて、里人達が工事の進み方を測つた時、それがまだ絶壁の四分の一にも達して居ないのを發見すると、彼等は再び落膽疑惑の聲をもらした。

「人を増しても、とても成就はせぬ事ぢや。あたたら、了海殿にだまかされて入らぬ物入をした」と、彼等は、はかどらぬ工事に、いつの間にかあき始めて居た。市九郎は、又獨り取殘されねばならなかつた。彼は、自分の傍に槌を振る者が、一人減り二人減り、遂には一人も居なくなつたのに氣が付いた。が彼は決して去る者は追はなかつた。黙々として、自分一人その槌を續けて行くのであつた。

里人の注意は、全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が深く穿たれ、ば穿たれるほど、その奥深く槌を振ふ市九郎の姿は、行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は、闇の中に閉された洞窟の中をすかし見ながら、了海さんは、まだやつて居るのかなあと疑つた。が、さうした注意も、しまひには段々薄れてしまつて、市九郎の存在は、里人の念頭から、屢々消え失せようとした。が、市九郎の存在が、里人に對して没交渉であるが如く、里人の存在も亦市九郎に没交渉であつた。彼には、たゞ眼前の大岩壁のみが存在するばかりであつた。

市九郎は、洞窟の中に端坐し始めてから、もはや十年にも餘る間、暗い冷たい石の上に坐り續けて居たために、顔は色蒼ざめ、双の眼は窪み、肉は落ち、骨は露はれ、此の世に生ける人の姿とも見えなかつた。が、市九郎の心には、不退轉の勇猛心がしきりに燃え旺つてた。

だ一念に穿ち進む外には、何物もなかつた。一分でも、一寸でも、岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎は、たゞ一人取殘されたまゝ、又三年を経た。すると、いつの間にか、里人達の注意は再び市九郎の上に歸りかけて居た。彼等が、ほんの好奇心から、洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間、川に面する岩壁には、採光の窓が一つ穿たれ、もはや此の大岩石の三分の一は、主として市九郎の瘠腕によつて貫かれて居る事がわかつた。

彼等は、再び驚異の眼をむいた。過去の無智を恥ぢた。市九郎に對する尊崇の心が、再び彼等の心に復活した。やがて、寄進された十人に近い石工の槌の音が、再び市九郎のそれに和した。

又一年経つた。一年の月日が経つ中に、里人達は、いつかしら目先の遠い出費を悔い始めて居た。寄進の人夫は、いつの間にか、一人

減り二人減つておしまひには、市九郎の槌の音のみが洞窟の闇をうちふるはして居た。が、傍に人が居ても居なくても、市九郎の槌の力は變らなかつた。彼はたゞ機械の如く渾身の力を入れて槌を擧げ渾身の力を以てこれを振下した。彼は自分の一身をさへ忘れて居た。主を殺した事も、剽賊を働いたことも、人を殺したことも、凡ては彼の記憶の外に薄れてしまつて居た。

一年経ち、二年経つた。一念の動くところ、彼の瘠せた腕は、鐵の如く屈しなかつた。丁度十八年目の終であつた。彼は、いつの間にか岩壁の二分の一を穿つて居た。

里人は、此の恐ろしい奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を少しも疑はなかつた。彼等は、前二回の懈怠を心から恥ぢ、七郷の人々が合力の誠を盡くして、擧つて市九郎を援け始めた。その歳、中津藩の郡奉行が巡視して、市九郎に對して賞美の言葉を下した。近郷

近在から、三十人に近い石工があつめられた。工事は、枯葉を焼く火のやうに進んだ。

人々は、衰殘の姿いたゞしい市九郎に、
「もはや、そなたは石工共の棟梁をなさりませ。自ら槌を振ふには及びませぬ」とすゝめた。が、市九郎は頑として應じなかつた。彼は、瘻れるならば槌を握つたまゝ、瘻れたいと思つて居るらしかつた。彼は、三十の石工が傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ懸命の力を盡くすこと、少しも前と變らなかつた。

が、人々が市九郎に休息を勧めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光もささぬ岩壁の奥深く坐り續けた爲であらう、彼の兩脚は、いつの間にか屈伸の自由を缺いて居た。僅の歩行にも、杖にすがらねばならなかつた。

その上、長い間、闇に坐して日の光を見なかつた爲であらう、また不

断に彼の身邊に飛散る石の碎片が、その眼を傷つけた爲でもあらう。彼の兩眼は朦朧として光を失ひ、物のあいりも辨へかねるやうになつて居た。

さすがに、不退轉の市九郎にも、身に迫る老衰を痛む心はあつた。身命に對する執着はなかつたけれども、中道にして殞れることを、何よりも無念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱ぢや」と彼は心の中に叫んで、身の老衰を忘れようと懸念に槌を振ふのであつた。

冒し難き大自然の威嚴を示して、市九郎の前に立ち塞がつて居た岩壁は、いつの間にか、衰殘の乞食僧の鐵のやうな心に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は、命あるものの如く、一路その核心を貫かんとして居るのであつた。

二

剝貫の工事が、成就に近づくに従つて、市九郎の健康は、過度の勞働によつて、痛ましく傷つけられた。が彼に取つて、それよりも、つと恐ろしい敵が、彼の生命を狙つて居るのであつた。

市九郎のために、非業の横死を遂げた中川三郎兵衛は、家臣の手にかゝつた事から、家事不取締とあつて、家は取潰されてしまつて、その時三歳であつた一子の實之助は、縁者のために養ひ育てられる事になつたのである。

實之助は、十三になつた時、彼は初めて自分の父が非業の死を遂げたことを聞いた。殊に、相手が對等の士でなくて、自分の家に養はれた奴僕であることを知ると、少年の心は無念の憤に燃えた。彼は、即座に復讐の一儀を肝深く銘じた。彼は、柳生の道場に入つて

家臣
市九郎即ち
今の丁海

劍道の修業に肝膽を砕いた。十九の年に、免許皆傳を許されると、彼は欣び勇んで報復の旅に上つたのである。若し、首尾よく本懐を達して歸れば、一家再興の肝煎もしようといふ、親類一同の激励の言葉に送られながら、

實之助は、馴れぬ旅路に幾多の艱難を経ながら諸國を遍歴して、ひとすら敵市九郎の所在を求めた。市九郎を、たゞ一度さへ見た事もない實之助に取つては、それは雲をつかむやうな覺束ない搜索であつた。五畿内、東海、東山、山陰、山陽、北陸、南海と、彼は漂泊の旅路に年を送り年を迎へ、二十七の年まで空虚な遍歴の旅を續けた。敵に對する怨も憤も、旅路の艱難に消磨せんとすること度々であつた。が、非業に殞れた父の無念を思ひ、中川家再興の重任を考へると、奮然と志を振ひ興すのであつた。

江戸を立つてから丁度九年目の春を、彼は福岡の城下に迎へた。

本土を空しく尋ね歩いた後に、邊陲の九州をも探つて見る氣になつたのである。

福岡の城下から、中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日、宇佐八幡宮に賽して、本懐の一日も早く達せられん事を祈念した。實之助は、参拜を終へてから境内の茶屋に憩うた。其の時に、ふと彼は、傍の百姓體の男が居合せた参詣客に、次のやうに話すのを聞いたのである。

「その御出家といふのは、元は江戸から來たお人ぢやげな。若い時に人を殺したのを懺悔して諸人濟度の大願を起したさうぢやが、今言うた樋田の剗貫は此の御出家一人の力で出來たと、言うてもよい位ぢや」と百姓が言つた。

此の話を聞いた實之助は、九年此の方未だ感じなかつたやうな興奮を覺えた。彼は、やゝ急き込みながら、

「卒爾ながら少々物を訊ぬる。その出家と申すは、年の頃は何程位ぢや」ときいた。その男は、自分の談話が武士の注意をひいた事を光榮であると思つたらしく、

「左様でございますな、私はその御出家を拜んだことはございませぬが、人のうはさては、もう六十に近いと申します。」

「丈は高いか、低いか」と、實之助は疊みかけてきいた。

「これも、しかとは、わかりませぬ。何様、洞窟の奥深く居られる故、しかとはわかりませぬ。」

「その者は俗名は、何と申したか存せぬか。」

「それも、とんとわかりませぬが、お生れは越後の柏崎で、若い時に江戸へ出られたさうでござります。」と百姓は答へた。

こゝまで聴いた實之助は躍り上つて欣んだ。彼は、江戸を立つた時に親類の一人から、敵は越後柏崎の生れゆゑ、故郷へ立廻るやも

計りがたい。越後は一入心を入れて探索せよ、といふ注意を受けて居たのであつた。

實之助は、これぞ正しく宇佐八幡宮の神託に相違ないと勇み立つた。彼は、その老僧の名と、山國谿に向ふ道とをきくと、もはや八つ刻を過ぎて居たにもかゝらず、必死の力を双脚に籠めて、敵の所在へと急いだ。そしてその日の初更近く、樋田村に着いたのである。彼は直ちに洞窟へ立向はうかと思つたが、あせつてはならぬと思ひ返して、その夜は樋田驛の宿に焦慮の一夜を明かし、翌日は早朝に起出でて、輕装して樋田の剗貫へと向つた。

剗貫の入口に着いた時、彼はそこに石の碎片を運び出して居る石工に訊ねた。

「此の洞窟の中に、了海といはるゝ御出家がおはすさうぢやが、それに相違ないか。」

「おはさないで何としよう。了海様は此の洞の主も同様な方ぢや。はゝゝゝと石工は事もなげに笑つた。

實之助は本懐を達する事はや眼前に在りと欣び勇んだ。が彼はあわててはならぬと思つた。

「して出入の口はこゝ一箇所か。」ときいた。敵に逃げられてはならぬと思つたからである。

「それは知れた事ぢや。向ふへ口を開ける爲に、了海様は非常な苦しみをなさつて居るのぢや」と石工が答へた。

實之助は多年の怨敵が囊中の鼠の如く目前に置かれてあるのを欣んだ。たとひその下に使はるゝ石工が幾人居ようとも斬殺すに何程の事があるべきと勇み立つた。

「其方に少し頼みがある。了海どのに御意得たい爲、遙々と尋ねて参つたものぢやと傳へてくれ。」と言つた。石工が洞窟の中へはい

つた後で、實之助は一刀の目くぎを濕した。彼は心の中で、生來初めて廻り逢ふ敵の容貌を想像した。洞門の開鑿の棟梁をして居るといへば、五十は過ぎて居るとはいへ、筋骨たくましき男であらう。殊に、若年の頃には、兵法に疎からざりしといふのであるから、ゆめ油断はならぬと思つて居た。

が暫くして實之助の面前へ洞門から出て来た一人の乞食僧があつた。それは、出て来たといふよりも、藁の如くはひ出て来たといふ方が適當であつた。それは、人間といふよりも、むしろ人間の殘骸といふべきであつた。肉ことごとく落ちて骨露はれ、脚の關節以下は處々たゞれて、永く正視するに堪へなかつた。破れた法衣によつて、僧形とは知られるものゝ、頭髮は長くのびて、皺だらけの額を掩うて居た。老僧は、灰色をした眼をしばたゝきながら實之助を見上げて、

「老眼衰へはてまして、いづれの方とも辨へかねます。」と言つた。實之助の極度にまで張詰めて來た心は、此の老僧を一目見た刹那たゞくとなつてしまつた。彼は心の底から憎惡を感じ得るやうな惡僧を欲して居た。然るに彼の前には、人間とも屍體とも付かぬ半死の老僧がうづくまつて居るのである。實之助は失望し始めた自分の心を勵まして、

「そのもとが了海といはるゝか」と意氣込んできいた。

「如何にも左様でござります。して、そのもとは」と老僧はいぶかしげに實之助を見上げた。

「了海とやら、如何に僧形に身を糞すとも、よも忘れは致すまい。汝市九郎と呼ばれし若年のみぎり、主人中川三郎兵衛を討つて立退いた覺があらう。某は、三郎兵衛の一子實之助と申すものぢや。もはや逃れぬ所と覺悟せよ。」

と實之助の言葉は、飽くまで落着いて居たが、そこに一步も許すまじき嚴正さがあつた。

が市九郎は實之助の言葉を聽いて、少しも駭かなかつた。「いかさま、中川様の御子息の實之助様か。いや、お父上を討つて立退いた者、此の了海に相違ござりませぬ。」と彼は自分を敵と狙ふ者に逢つたといふよりも、舊主の遺兒に逢つた親しさを以て答へた。が、實之助は市九郎の聲音に欺かれてはならぬと思つた。

「主を討つて立退いた非道の汝を打つために、十年に近い年月を艱難のうちを過した。こゝで會ふからは、もはや逃れぬ所と尋常に勝負せよ。」と言つた。

市九郎は少しも怯おそびれなかつた。もはや、期年の中に成就すべき大願の成るを見果てずして死ぬことが稍悲しまれたが、それもおのれが惡業の報であると思ふと、彼は死すべき覺悟を定めたので

ある。

「實之助様。いざお斬りなされい。お聞き及びもなされたらうが、これは了海奴が罪亡しに掘穿たうと存じた洞門でござるが、十九年の歳月を費して九分までは出来申した。了海身は果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ残すこともござりませぬ。」と言ひながら、彼は見えぬ眼をしばたゝいたのである。

實之助は、此の半死の老僧に接して居ると、親の敵に對して懷いて居た憎しみが、いつの間にか消え失せて居るのを覺えた。敵は父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみぬいて居る。しかも、自分が一度名乗りかけると、唯々として、命を捨てようとして居るのである。かゝる半死の老僧の命を取ることが、果して復讐であらうかと、實之助は考へたのである。が、然し此の敵を討た

ない限りは、多年の放浪を切り上げて、江戸へ歸るべきですがはなかつた。まして、家名の再興などは、思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は、憎悪よりも、むしろ打算の心から、此の老僧の命を縮めようかと思つた。が、烈しい燃ゆるが如き憎悪を感じずして、打算から人間を殺すことは、實之助に取つて忍びがたい事であつた。彼は、消えかゝらうとする憎悪の心を勵ましながら、討ちがひなき敵を討たうとしたのである。

その時であつた。洞窟の中から、走り出て來た五六人の石工は、市九郎の危急を見ると、驚いて彼をかばひながら、
「了海様を何とするのぢや。」と實之助を咎めた。彼等の面には、仕宜に依つては許すまじき色が、あり／＼と見えた。

「仔細あつて、その老僧を敵と狙ひ端なくも今日廻り合うて、本懐を達するものぢや。妨げ致すと、餘人なりとも容赦は致さぬぞ。」と實

之助は凜然と言つた。

がそのうちに、石工の数はふえ、行路の人々が幾人ともなく立ち止つて、彼等は實之助を取巻きながら、市九郎の身體に一指をも觸れさせまいと、銘々に教圍まもり始めた。

「敵を討つ討たぬなどは、それはまだ世に在る中の事ぢや。見らるる通り、了海殿は、染衣薙髪の身である上に、此の山國谿七郷の者に取つては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや。」と、その中のある者は、實之助の敵討を、叶はぬ非望であるかのやうに言張つた。

が、かう周囲の者から、妨げられると、實之助は敵に對する怒がいつの間にか蘇つて居た。彼は、武士の意地として、手を拱こめて立ち去るべきではなかつた。

「たとひ、沙門の身であらうとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を討つ者を妨げ致す者は、一人も容赦はない。」と、實之助は、一刀の鞘

を拂つた。實之助を圍ふ群衆も、皆悉く身構へた。すると、その時市九郎は、じわがれた聲を張りあげた。

「皆の衆、お控へなされい。了海、討たるべき覺え十分ござる。此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの爲ぢや、今かゝる孝子の御手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期いっしの願ぢや。皆の衆、妨げ無用ぢや。」かう言ひながら、市九郎は、身を挺して實之助の傍に、いざり寄らうとした。かね、市九郎の強い意志を知りぬいて居る周囲の人々は、彼の決心を、醸すべき由もないのを知つた。市九郎の命は、こゝに終るかと思はれた。その時に、石工がしらが、實之助の前に進み出てながら、

「御武家様も、御聞き及びてもござらうが、此の剝貫は、了海様一生の大誓願にて、二十年に近き御辛苦に、身心を碎かれたのぢや。いかに御自身の悪業とはいへ、大願成就を目前に置きながら、御果てな

さるゝこと、如何ばかり無念であらう。我等の擧つてのお願ひは、長くとは申さぬ、此の刳貫の通じ申す間、了海様のお命を我等に預けて下さらぬか。刳貫さへ通じた節は、即座に了海様を存分になさりませ。」と、彼は誠を表して哀願した。群衆は口々に、

「ごとわりぢや〜」と賛成した。

實之助も、さう云はれて見ると、その哀願を聴かぬ譯には、行かなかつた。今こゝで、仇を討たうとして、群衆の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待たなければ、今てさへ自ら進んで討たれようと云ふ市九郎が、義理に感じて首を授けるのは、必定であると思つた。又さうして、打算から離れても、仇とはいひながら此の老僧の大誓願を遂げさせてやるのも、決して不快なことではなかつた。實之助は、市九郎と群衆とを等分に見ながら、

「了海の僧形にめてて、その願ひ許して取らさう。束へた言葉を忘

れまいぞ。」と叫んだ。

「念もないこととござる。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向ふ側へ通じた節は、その場を去らず、了海様を討たせ申さう。それまでは、ゆる〜と此の邊りに御滞在なされませ。」と、石工がしらは、穩かな口調で言つた。

市九郎は、此の紛擾が無事に解決が付くと、それに依つて徒費した時間が、如何にも惜しまれるやうに、にぎりながら洞窟の中へ入つて行つた。

實之助は、大切の場合に思はぬ邪魔が入つて、目的が達し得なかつたことを憤つた。彼は如何ともし難い鬱憤を抑へながら、石工の一人に案内されて、木小屋の中へ入つた。

自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討ち得なかつた自分の腑甲斐なさを、無念と思はずには居られなかつた。彼の

心はいつの間にか焦ら立たしい憤りで一杯になつて居た。彼はもう剗貫の竣成を待つといつたやうな敵に對する緩かな心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立退かうと決心の臍を固めた。が、實之助が市九郎の張番をして居るやうに石工達は實之助をそれとなく見張つて居た。最初の二三日を心にもなく無爲に過したが、丁度五日目の晩であつた。毎夜の事なので石工達も警戒の眼を緩めたと見え、丑に近い頃には何人も深い眠に入つて居た。實之助は今宵こそと思ひ立つた。彼は、がばと起き上ると、枕元の一刀を引きよせて、靜に木屋の外に出た。それは早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦巻きながら流れて居た。が、かうした周圍の風物には眼もくれず、實之助は、足を忍ばせて、ひそかに洞門に近づいた。削り取つた石塊が、所々に散らばつて、歩を運ぶ度

毎に足を痛めた。

洞窟の中は、入口から來る月光と、所々に剗り明けられた窓から射し入る月光とで、所々ほの白く光つて居るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探り、奥へくと進んだ。

入口から、二町ばかりも進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、クワツクワツと間を置いて響いて來る音を耳にした。彼は最初それが何であるか判らなかつた。が、一步進むに従つて、その音は擴大して行つてしまひには、洞窟の中の夜の寂靜の裡に、こだまするまてになつた。それは、明に岩壁に向つて鐵槌を下す音に相違なかつた。實之助は、その悲壯な凄みを帯びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近附くに従つて、玉を打碎くやうな、鋭い音は、洞窟の周圍にこだまして、實之助の聽覺を猛然と襲つて來るのであつた。彼は、此の音をたよりに、はひながら近づいて行つ

た。此の槌の音の主こそ敵了海に相違あるまいと思つた。ひそかに一刀の鯉口をくつろげながら息を潜めて寄りそつたその時ふと彼は槌の音の間々にさゝやくが如くうめくが如く了海が經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしわがれた悲壯な聲が水を浴びせられるやうに實之助の心に徹して來た。深夜、人去り草木眠つて居る中にたゞ暗中に端坐して鐵槌を振つて居る了海の姿が墨の如き闇にあつて尙實之助の心眼にありくと映つて來た。それはもはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつてたゞ鐵槌を振つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は握りしめた太刀の柄がいつの間にか緩んで居るのを覺えた。彼はふと自分自身を顧みた。既に佛心を得て衆生の爲に碎身の苦を嘗めて居る高德の聖に對し、深夜の闇に乗じて剽賊の如く獸の如く瞋恚の劍を抜きそばめて

近寄らうとする自分を顧みると彼は強い戰慄が身體を傳うて流れるのを感じた。洞窟を搖がす力強い槌の音と悲壯な誦經の聲とは實之助の心を散々に打碎いてしまつた。彼は潔く竣功の日を待ち、彼との約束の果たさるゝのを待つより外はないと思つた。實之助は深い感激を懷きながら洞外の月光を直指して洞窟の外にはひ出たのである。その事があつてから實之助は洞窟の外の木小屋の内に朝夕を送りながら心靜かに劔貫の成就されるのを待つて居た。彼はもう老僧を討つて立ちのかうといふやうな嶮しい心は、少しも持つて居なかつた。了海が逃げも隠れもせぬ事を知ると彼は好意を以て了海がその一生の大願を成就する日を待つてやらうと思つて居た。

彼一人が爲すこともなく暮して居るにも拘はらず、周圍の石工達は、寸陰をも惜しんで懸命に働いて居た。了海の不斷の精神がい

つの間にか石工達の心にも浸み渡つて居るやうであつた。彼等は實之助に對して朝夕快い挨拶をおくつた。

「お武家様、今日は何處へおはせられた。などと問ひかけられるたびに、實之助は自分の所在のない生活が氣になつて居た。周囲の人が、凡て狂氣のやうに働いて居る中に、自分一人漠然と暮して居る事が、彼に心苦しく思はれ始めた。二月も、かうして漠然と暮して居る中、彼はふと思ひ付いた。かうして爲す事もなく待つて居るよりも、自分も此の大業に一臂の力を盡くす事に依つて、幾何でも成就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に、復讐の期日が締められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼は其の日から、石工の群に伍して、槌を振り始めたのである。かうして敵と敵とが、相並んで槌を下し始めたのである。實之助は、本懐を達する日が一日も早かれと、懸命に槌を振ふのであつた。

了海は、實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して、惜しからぬ命を孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう。彼は、今までも見られなかつたやうな烈しさで、狂人のやうに岩壁を打碎いて行くのであつた。

その中に、月が去り月が來た。最初は、自分自身の爲に槌を振つて居た實之助も、此の剗貫の大業を、爲し甲斐のある仕事であると思ふやうになつて居た。阿修羅の如く槌を振つて居る了海の姿を見て居ると、彼はその勇猛心に動かされて、ともすれば讐敵の恨を忘れがちであつた。石工どもが、晝の疲れを休めて居る眞夜中にも、此の敵同志は、黙々として槌を振ふことなどもあつた。

それは、了海が樋田の岩壁に第一の槌を下してから、丁度二十一年目、實之助が了海に廻り逢うてから、一年六ヶ月を経た享和三年九月十日の夜であつた。此の夜も石工どもは、悉く小屋に退いて、了

享和三年
紀元二四六三
徳川十一代將
軍家齊の頃

海と實之助のみが、終日の疲勞にめげず、懸命に槌を振つて居た。その夜九つに近い頃であつた。了海が力を籠めてふり下した槌が、朽木を打つが如く何の手答もなかつたので、思はず力餘つて槌を持つた右の掌が岩に當つた。その時であつた。彼は「あつ」と思はず聲をあげた。了海の朦朧たる老眼にも、まぎれなく、その槌に破られた小さい穴から、月の光に照された山國川の姿がありくと映つたのである。了海は「おう」と全身をふるはせるやうな、名狀し難い叫聲をあげたかと思ふと、それにつゞいて、狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑ひが、洞窟を物凄くどよめかしたのである。

「實之助どの、御覽なされい。二十年の大誓願、今宵端なくも成就いたしました。」かう言ひながら、了海は實之助の手を取つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黒ずんだ土の見えるのは、岸にそふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは、そこに手を取り

あうて、大歡喜の涙に咽んだのである。が暫くすると了海は身を退つて、「いざ實之助殿、約束の日ぢや。御斬りなされい。かゝる法悦の最中に往生致すれば、未來は淨土に生るゝこと、必定疑ひなしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工共が、妨げを致さう。いざお斬りなされい」と、彼のしわがれた聲が、洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助は、了海の前に手を拱いて坐つたまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧出づる歡喜に耀く、潤びた老僧の顔を見て居ると、彼を敵として殺す事などは、思ひ及ばぬ事であつた。敵を討つなどといふ心よりも、此の羸弱い人間の二つの腕に依つて成し遂げられた偉業に對する、驚異と感激との心で、胸が一杯であつた。彼はいざり寄りながら、再び老僧の手を取つた。二人はそこに凡てを忘れて、感激の涙にいつまでも浸つて居たのであつた。(菊池寛—恩替の彼方に)